

百人一首にみる植物用語の含有率に関する”とてあえずな”調査

日本の国土面積に占める森林の割合は66%であり、先進国の中でもフィンランド、スウェーデンに次ぐ森林大国である¹⁾。一方、百人一首は、平安時代末期から鎌倉時代初期にかけて活動した公家の藤原定家を選んだ100人の歌人からなる秀歌撰であり、その内訳は、男性79名、女性21名で構成されている²⁾。

日本における国土面積に占める森林の割合を見てもわかるように、日本は古来から自然に親しむ環境が整っており、百人一首が詠まれた平安時代や鎌倉時代では、テクノロジーが発達した現代に比較して、その環境がさらに著しかったに違いない。このことは、百人一首に自然に関係した用語が数多く出現することからも明らかである。

本新聞は、百人一首から自然に関係した用語を探し、その中でも植物用語がどのくらい含有されているかを調査するものである。

百人一首の中には原文に直接に植物名がなくとも、そのイメージがなければ句として成立しないものがある。例えば、在原業平朝臣による

「ちはやぶる 神代もきかず 竜田川 からくれなゐに 水くくるとは」

は直接植物名はないが、「からくれなゐ」は紅葉の紅色を讃えて唐紅と表現し、また、現代訳³⁾でも紅葉として用いられている。このような句は植物用語ありと見なすこととした。

カウントの場合分けは、①植物用語あり、②植物用語はないが、季節や山川などの用語あり、③動物用語あり、④虫用語ありの4つとした。ただし、①と②が両方含まれる場合などは①を優先してカウントした。百人一首は、文献³⁾に基づき、各句の意味を原文と現代訳と対比して調べた。

表 用語の場合分けにおける句のカウント

①植物用語あり	33
②季節・山川などの用語あり	14
③動物用語あり	5
④虫用語あり	2

表に用語の場合分けにおける句のカウントを示す。この表をみて分かる通り、①植物用語ありが多く、33/100句のため、百人一首における植物用語の含有率は33%であった。最も多い植物用語は葉で、次に花であった。②季節・山川については秋や山が多く、これらが含まれた句も植物を連鎖させる内容が多かった。例えば、文屋朝康の

「白露に 風の吹きしく 秋の野は つらぬきとめぬ 玉ぞ散りける」

は秋であり、白露も現代訳³⁾によれば、(草葉の上に落ちた)白露となっているため、植物との関与が非常に高い。このことから、①と②を合わせた用語で含有率を計算すると、(33+14)/100句で、47%となり、ほぼ半分近い句に何らかの植物(自然)との関連性を見出すことができた。なお、猿丸大夫のよる

「奥山に 紅葉踏み分け 鳴く鹿の 声聞くときぞ 秋は悲しき」

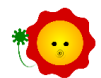
のように虫用語以外すべて入っている盛りだくさん句もあった。これらから、日本の暮らしは植物(自然)との関係が密接であり、百人一首の各句からもその関係性を読み解くことができよう。

1) 日本の森林面積と森林率: http://www.shinrin-ringyou.com/forest_japan/menseki_japan.php. (閲覧 2014.11.14)

2) 百人一首: <http://ja.wikipedia.org/wiki/百人一首>. (閲覧 2014.11.14)

3) 百人一首の風景: <http://www.hyakunin.stardust31.com/index.html>. (閲覧 2014.11.14)

植
ほ
新聞



植物いさいさーくろ

第33号

発行者:犬丸